東京2020大会

「東京2020 復興のモニュメント」をお披露目　被災地と世界つなぐ

2021年7月13日

「東京2020 復興のモニュメント」は、被災地と世界を結び付け復興を後押しすることを目的とし、東京2020組織委員会が、東京都、東京藝術大学、岩手県、宮城県、福島県、および株式会社LIXILと連携して行う事業です。モニュメントは合計で3体が制作され、材料には、株式会社LIXIL からの提供により、被災3県の仮設住宅で使われていた窓やドアなどを再生したアルミが使用されています。また岩手県、宮城県、福島県の各県で2019 年夏に開催したワークショップでは、地元の中学生・高校生と東京藝術大学の学生が協力し、デザインのイメージや、モニュメントに載せるメッセージを制作しました。

モニュメントは東京2020大会期間中、オリンピックスタジアム近くの聖徳記念絵画館前に設置されます。式典には、東京2020組織委員会、東京都、東京藝術大学、岩手県、宮城県、福島県、および株式会社LIXILの代表者も出席。式典ゲストの高橋さんは「東日本大震災から10年ですが、忘れてはならにはない出来事です。東京2020大会が希望や勇気の光になればと思います」。長島選手は「モニュメントに使用されているアルミには、人々の思いも巡ってくると思います。アスリートとして被災地の思いを大切に頑張っていきます」と、それぞれコメントを寄せました。

式典にゲストとして登壇した高橋礼華さん（左）と長島理選手

モニュメントのデザインに関わった東京藝術大学の卒業生と大学院生も駆けつけました。福島県のモニュメントをデザインした岡つくしさんは「私は『つなぐ』をコンセプトにデザインを考えました。ポップな感じに仕上がって嬉しいです。一生に一度の思い出になりました」と笑顔を見せました。宮城県と岩手県をデザインした福井汐音さんは、「高校生たちが一生懸命にメッセージを考えている中、よりいいモニュメントに仕上げなくてはという気持ちで関わりました。カラフルで、にぎやかなものができました」と思いを語りました。

福島県のモニュメントをデザインした岡つくしさん

岩手県と宮城県のモニュメントをデザインした福井汐音さん

制作の指導に当たった東京藝術大学美術学部の赤沼潔教授は、「特に東北3県のワークショップでは被災地のリアルな姿に触れて、学生たちが変わっていく様子がありました。学生も私も成長できる機会となり、印象に残るプロジェクトでした」と話しました。

式典では、2019年のワークショップに参加した高校生からの「選手の頑張りで被災地に元気を届けてほしい」や「東京2020大会にモニュメント制作という形で関われて嬉しい」といったメッセージが披露されました。大会終了後、モニュメントにはアスリートからのサインを載せ、東京2020大会のレガシーとして被災3県に設置される予定です。

関連記事

被災地の思いに触れながら　東京2020 復興のモニュメントを制作する学生たち

東京2020 復興のモニュメント

©公益財団法人東京オリンピック･パラリンピック競技大会組織委員会
All rights reserved.

写真提供：
アフロスポーツ　ゲッティー イメージズ　フォト・キシモト　竹見脩吾